

ホタルが飛び交う里山の風景が今よみがえる

ホタルが舞う田舎の原風景を、今の子どもたちにも見せてあげたい
市内には、そんな思いを胸にホタルの放流を続けている人が大勢いる
「門屋ほたるの会」や「西側区町内会水神公園どんどの会」の会員たちも
その一人だ

ホタルの幼虫を放流

3月11日、高松地区門屋の「門屋ホタルの里」で、「門屋ほたるの会」（沖二三男 世話人）

の会員の手でホタルの幼虫が放流されました。高松幼稚園の園児らを含む親子40人も参加し、会員が持ち寄ったゲンジボタルの幼虫千匹とエサになるカワニナが、門屋公民館の西側に広がる水田脇の水路へ静かに放されたのです。同会の会員は、門屋地区の有志16人。門屋地区にホタルを呼び戻したいと、平成13年から放流を繰り返しています。

この日、用意されたホタルの

幼虫は、会員が昨年の6月から自宅で大切に育ててきたもの。エサのカワニナは、ホタルの幼虫が好んで食べる巻き貝の一種で、付近の水路に棲息しているものです。

3月19日には、御前崎地区西側区の「水神公園どんどん」でもホタルの幼虫が放流されました。地域の子どもたちとの交流を続ける「西側区町内会水神公園どんどの会」（大澤達夫 代表）が、御前崎保育園の園児を招いて、ゲンジボタルの幼虫とカワニナを公園内の水路に放流したのです。同会では、ホタルのほかにも公園内の池に棲息するカワエビ、カエルなどの生態について、園児たちにわかりや

すく説明するとともに、木の葉や草を器用に使いこなし、草笛などの昔の遊びを教えています。50人の会員が、この公園を整備し始めて4年目が経過し、「水神公園どんどん」は、今や地域の憩いの場として欠かすことができませぬ。園児たちとの交流も3年目を迎え、世代を超えたコミュニケーションは、会員にとっても楽しみの一つとなっています。

毎年、5月末から6月にかけて公園内では、羽化したホタルの飛び交う姿が見られます。ここでは、地元住民や園児を招き、同会が主催する観察会が開かれ、御前崎に夏の訪れを感じさせてくれるのです。



「門屋ホタルの里」に建てられた案内板



親子で幼虫を放流（門屋ホタルの里）



大澤代表の説明に聞き入る園児



ホタルの成長を願い放流する（水神公園）